

大学ラグビーのコーチングにおける一考察
-大学選手権出場チームの比較を通じて-

An observation of coaching in University Rugby
-Through the comparison of the teams participating in the National University Rugby
Tournament-

1K09B020

伊藤平一郎

主査 奥野景介 先生

副査 山本巧 先生

【緒言】

ラグビーワールドカップが 2019 年に日本での開催が開催されることが決定しており、これを機に、現在日本ラグビーフットボール協会では競技力向上を図っている。その代表的なものとしてユース世代（現在の高校生から大学生、トップリーグの若手選手）を対象とした Jr. JAPAN たる組織によって日本代表と同じ指導を受け一貫指導が行われている。大学では全国大学選手権は 2011 年度まではトーナメント形式であったが 2012 年度からはグループ形式の形をとり試合数を増やすことで競技力向上を図っている。他にも、2012 年度から関東大学春季大会が実施され各大学の試合数を増加させ競技力の向上を図っており、大学ラグビー界から日本ラグビー界の競技力向上を目指して取り組まれた。

上記の内容から日本のラグビー界では大学ラグビーでの競技レベルの向上が、日本の競技レベルを向上させるのに重要であるということが示唆される。そのためにも大学ラグビーでのコーチングが重要であるという可能性が考えられる。日本ラグビーフットボール協会作成のプレーヤー育成指針(2012)によると 19 歳から 22 歳までをステージ 4 としており、ステージ 3 の 15 人制ラグビーの代入からよりレベルの高い 15 人制ラグビーに取り組むこととされている。

【研究目的】

大学ラグビーは、日本国内最高峰のリーグであり、国際競技力向上を担うトップリーグに多くのプレーヤーを送っている。したがって大学ラグビーは、国際競技力の基盤をつくる時期と考えられる。大学選手権優勝チームとベスト 8 チームのゲーム様相を比較しながら、大学ラグビーにおけるコーチング内容について検討し、日本ラグビーの競技力向上への過程の一助とすることを目的とした。

【研究方法】

対象 5 試合の W 大学、T 大学の JSPORTS で放映した試合映像から各試合を質的分析し、T 大学、W 大学のゲームからゲームスコア、ラグビー憲章にもあげられているボールの争奪、プレーの継続の視点からゲーム様相を比較検討した。

【結果及び考察】

T 大学の 3 試合のスタッツと質的分析からみていくと、3 試合通じていることはタックルミスが少なく、ボール保持時間も相手チームより長く保持していることが多かった。FW どのキープ力もセットプレイでの攻撃権の争奪場面で発揮されており、T 大学の特徴、先述は顕著に発揮されていた。

W 大学の 3 試合のスタッツと質的分析からみていくと、ラック数の多さは走り勝つと唱えている攻撃回数多くなっているため多くなっていると考えられる。タックルミスが全体的に多く、ボール保持時間は全試合相手の方が上回っており、「守り続けて勝つのは辛い」と考えているが良くない結果になっているのがわかる。

プレーヤー育成指針と今回の研究において分析したゲームスコア、ボールの争奪、プレーの継続の 3 点の関連はプレーヤー育成指針 STEP4 の項目に通ずるものがあると筆者は考える。

ゲームスコアでは T 大学は数少ない得点機を決め、相手に得点をさせないのが大学選手権優勝の秘訣であると考えられる。これらのことはプレーヤー育成指針(2012)の「防御サイクル」の徹底が行われている結果だと考える。

ボール争奪の部分ではプレーヤー育成指針(日本ラグビーフットボール協会, 2012)に当てはめていくと、スクラム、ラインアウト、キックオフはセットプレイ各種の強化に当てはまり、タックルミスは防御サイクルの指導に当てはまり、BD ターンオーバーは攻防のサイクルに当てはまると考える。

プレーの継続の部分ではプレーヤー育成指針(日本ラグビーフットボール協会, 2012)に当てはめていくと、ボール保持時間はタイムマネジメントや攻撃サイクルに当てはまり、ハンドリングエラーは基本の技術の向上を行えば改善されていく点であり、これらが改善されていくと攻撃サイクルの向上にも繋がってくると考える。

【結論】

その結果、大学選手権優勝するレベルにあるチームほどプレーヤー育成指針(2012)における STEP4 の中に当てはまるもの(主に、基本、セットプレイ各種、防御サイクル、タイムマネジメント)を試合中に遂行できていることがわかった。上記の結果基本、セットプレイ各種、防御サイクル、タイムマネジメントに関するコーチングを行っていけば日本ラグビーの競技力向上への過程の一助となると筆者は考える。